

『大阿弥陀經』訳注(2)

辛 嶋 静 志

はじめに

今回訳出したのは、阿弥陀仏の光明のすばらしさとその仏国土の様々な特徴、またそこにいる菩薩・阿羅漢の優れていることを描いた部分である（大正蔵第12巻，302b20～303c25）。底本には高麗蔵所収本を用い、『中華大蔵經』第9巻所収の金蔵広勝寺本などを参照した。

なお、訳の部分は、1995年から1997年春まで真宗教学研究所で行われた『大阿弥陀經』研究会で、助手（当時、現在は研究員）の竹橋太氏が下訳を準備し、著者が大いに手を入れたものを参考にした。

和訳

（大正蔵第12巻，302b20）

仏はおっしゃった。

「阿弥陀仏の光明は最もすぐれ¹⁾、第一で、比肩するものがなく、（他の）仏たちの光明はみな及ばない。八方上下の無数の仏たちのなかには、その²⁾頭頂³⁾（から発する）光が七丈を照らす仏もおられるし、その頭頂の光が一里を照らす仏もおられるし、その頭頂の光が二里を照らす仏もおられるし、（以下、同様に、五里、十里、二十里、

1) 阿彌陀佛光明……我但爲若曹小説之耳 以下，303b1までの阿弥陀仏の光明の功德の描写は第二十四願が成就した様を描いている。

2) 有佛頂中光明照七丈……有佛頂中光照六百萬里 この部分は『平等覺經』以外の諸本には対応がない（cf. 香川 1984：172-173）。

3) 頂 『平等覺經』は以下すべて「頂」（うなじ）とする。

四十里，八十里，百六十里，三百二十里，六百四十里，千三百里，二千六百里，五千二百里，一万四百里，二万一千里，四万二千里，八万四千里，十七万里，三十五万里，七十万里，百五十万里，三百万里，) 六百万里を照らす仏もおられるし，その頭頂の光が一仏国を照らす仏もおられるし，その頭頂の光が二仏国を照らす仏もおられるし，(以下，同様に，四仏国，八仏国，十五仏国，三十仏国，六十仏国，百二十仏国，二百四十仏国，五百仏国，千仏国，二千仏国，四千仏国，八千仏国，一万六千仏国，三万二千仏国，六万四千仏国，十三万仏国，二十六万仏国，五十万仏国，百万仏国，) その頭頂の光が二百万仏国を照らす仏もおられる。」

仏はおっしゃった。

「八方上下の無数の仏の頭頂の光明が照らすのはこの程度である。阿弥陀仏の頭頂の光明は千万仏国を照らす。

仏たちの光明が照らす距離に違いがあるのはなぜかという点、彼らが前世、過去世⁴⁾に菩薩として道を求めていたときに願った(仏になってからの)功德に本来それぞれ⁵⁾大小の区別があり、彼らが後に仏になったときに、それぞれ(願った功德)実現する。だから、(仏たちの)光明は少しずつ異なるのである。仏⁶⁾たちの超人的な力は等しいのである。(彼らは)自由自在思い通りに行動し、(衆生が)前もって予測することができない。(303a) 阿弥陀仏の光明は最も遠くまで照らすことができ、(他の)仏たちの光明はいずれもかなわない。」

仏は称えた「阿弥陀仏の光明はとてもすばらしい⁷⁾。阿弥陀仏の光明はとてもすばらしい⁸⁾。すばらしいもののなかでも明るくきれいで⁹⁾，とてもりっぱで¹⁰⁾，卓越して，

4) 前世宿命 「前世」と「宿命」は同義。「宿命」に関しては、訳注(一)注(96)を参照。

5) 各自 仏典以前から見える表現。仏典での例は、例えば Krsh (1998). 160-161を見よ。

6) 諸佛威神同等爾。自在意所欲作爲，不豫計 この一文は前後の内容と少しずれる。あとから挿入されたものか。なお、類似した表現が後に出る。すなわち「佛威神甚重，自然所欲作爲。意欲有所作爲，不豫計」(309c11-12)。

7) 光明極善……光明中之最明無極也 以下、阿弥陀仏の epithet が列挙される。本経と『平等覺經』は、阿弥陀仏の光明のすばらしさを表す形容句を列挙しているが、『無量壽經』・『如來會』・宋訳・梵本・藏訳は阿弥陀仏の別号を列挙する形をとる。

8) 佛稱譽阿彌陀佛光明極善。阿彌陀佛光明極善 『平等覺經』には最初の「極善」がなく、「佛稱譽阿彌陀佛光明。阿彌陀佛光明極善」(仏は阿弥陀の光明を称えた。「阿弥陀の光明はとてもすばらしい」とある。この方が分かりやすい。

9) 明好 この語は本経では六例見える。Krsh (1998). 80には『正法華經』に出る例を列挙している。

10) 快 この場合の「快」は「好い」という意味。訳注(一)注(18)「快善」を参照。

最高である。阿弥陀仏の光明は清らかで、けがれなく、欠点¹¹⁾もない。阿弥陀仏の光明はすばらしく、太陽や月の光より百千億万倍もすぐれている。仏たちの光明のなかでもっとも明るい。光明のなかでもっともすばらしい。光明のなかでもっともすぐれている。光明のなかでとてもすばらしい¹²⁾。仏たちの（光明の）なかの王である¹³⁾。光明のなかでもっとも尊い。光明のなかでもっとも明るく¹⁴⁾、極まりない。

（阿弥陀の光明は）¹⁵⁾ 無数の世界¹⁶⁾ を輝き照らし、暗闇のところは常にすっかり明るくなる。あらゆる人々¹⁷⁾ や飛ぶ虫・這う虫など¹⁸⁾ はみな阿弥陀仏の光明を見る。見ればみな慈しみの心をいだいて歓喜する。世間の、淫らな心や怒りや愚かさをもつものたちはみな阿弥陀仏の光明をみて正しい行いをなす。地獄¹⁹⁾・鳥獣・餓鬼²⁰⁾（の境涯）や（棍棒や鞭で）打たれ²¹⁾ 苦しみを受ける²²⁾ 境涯にいるものは、阿弥陀仏の光明がさしてくるのを見るや、（苦しみ）はみな止み、二度と懲らしめられず、死んだのちは残らずみな憂苦から解脱する。

阿弥陀仏の光明の名声は八方上下にはてしなくひろく広く知れわたっていて、無数の仏国の神々や人々で聞いたことのないものはいないし、聞いて（輪廻から）度脱しないものはいない。」

仏はおっしゃった。

「私一人が阿弥陀仏の光明を称えるのではない。八方上下の無数の仏たち、辟支仏、菩薩、阿羅漢たちもみな同じように称えているのだ。」

仏はおっしゃった。

「もし人々、善男子、善女人が『阿弥陀仏』という名前を聞き、（その）光明を誉

11) 缺減 従来の辞書類には採られていない表現。Krsh (1998). 345には『正法華經』に出る例を列挙している。

12) 快善 訳注（一）注(18)を参照。

13) 諸佛中之王也 『平等覺經』には「諸佛光明中之王也」とある。

14) 最明 『平等覺經』には「壽明」とあるが、おそらく「最明」の誤伝であろう。

15) 『平等覺經』には「無量清淨佛光明」とある。

16) 無數天下 訳注（一）注(100)を参照。

17) 諸有人民 『平等覺經』も同じ。本經の第二十四願の対応箇所では「諸天人民」とある。「諸有」は「あらゆる」の意味。Krsh (1998). 604を参照。

18) 蛸飛蝶動 訳注（一）注(14)を参照。

19) 泥犁 訳注（一）注(40)を参照。

20) 薜荔 訳注（一）注(41)を参照。

21) 拷掠 『梁書』などに見える（HD. 8. 636a）。「拷掠」（『搜神記』などに見える。HD. 6. 554b）に同じ。

22) 勤苦 先秦の文獻から見える表現だが、仏典では「苦しみ、苦しみを受ける」の意味で使われる。Krsh (1998). 330を参照。

め称え、一日中絶えまなくひたすらその光明のすばらしさを誉め称えれば、(彼らの) 願い通りに²³⁾ 阿弥陀仏の国に生まれ行き、多くの菩薩、阿羅漢に尊敬されるであろう。もし、そののち仏になれば、(その仏の) 光明も八方上下の無数の仏たち、辟支仏、菩薩、阿羅漢たちに、(阿弥陀仏の光明と) 同じように称えられるであろう。」

すると、比丘たち、菩薩、阿羅漢たち、神々、帝王、人々はこれを聞いて、みな飛び上がるほど喜び、讃歎しないものはいなかった。

仏はおっしゃった。

「私が昼夜を問わずまる一劫かけて、阿弥陀仏の光明がすばらしく、すぐれていることを語り、(その) すばらしさを誉め称えつづけたとしても、(303b) 言い尽くせるものではない。私は君たち²⁴⁾ にさわりだけ話したにすぎない。」

仏は²⁵⁾、阿弥陀仏が菩薩としてこの二十四願を求めつづけ成就したことを説かれた。その時、阿闍世王の太子²⁶⁾ が五百人の迦羅越²⁷⁾ の長者²⁸⁾ の息子たちとそれぞれ一本の黄金の華蓋²⁹⁾ をもって仏のもとを訪れ、前に進んで仏を礼拝し、ひたいを仏の足につけ(礼拝し)、みな黄金の華蓋をもって前に進んで仏に差し上げ、みな後ろに下がってかたえに坐って、教え³⁰⁾ を聞いた。

阿闍世王の太子と長者の息子たち五百人とは、阿弥陀仏の二十四願を聞いて、みな飛び上がるほど喜び、心の中で同時に願った。「私たちが将来、仏になるときは、みな阿弥陀仏のようになりますように³¹⁾」

仏(釈尊)はすぐに知って、比丘たちにおっしゃった。「これら阿闍世王の太子と長者の息子たち五百人とは、無数劫後に³²⁾ みな阿弥陀仏のような仏になるであろう」

23) 在心所願 訳注(一)注(55)を参照。『無量寿経』の対応箇所には「隨意所願」(270b10)とある。

24) 若曹 複数を表す「曹」は先秦代の文献から見える(GY. 129参照)。Zhu 172には仏典での用例を列挙している。

25) 佛説阿彌陀佛爲菩薩……莫不代之歡喜者 この部分は『平等覺経』以外の諸本には対応する文がない(cf. 香川 1984: 179)。

26) 阿闍世王太子 「阿闍世」は Skt. *Ajātaśatru* に対応する音写。

27) 迦羅越 Skt. *Kapilavastu* の俗語形(*Kavilavatthu*)の音写。

28) 長者 「長者」は古代から見える表現だが、徳が高く尊敬され、郷邑で指導者の立場にあり、しかも概して富豪であったようだ。仏典では *grhapati* (居士)、*śreṣṭhin* (組合長)などの訳語に使われる。

29) 華蓋 この語は『漢書』などに見え(HD. 9. 405b)、帝王や貴族が外遊するとき覆う天蓋。仏典では *puṣpa-cchatra* ([天の]花のできた天蓋)の訳として使われることもある。

30) 經 訳注(一)注(19)を参照。

31) 令 訳注(一)注(43)を参照。

32) 却後 後漢代の文献から見える語。Krsh (1998). 345を参照。そこに挙げた参考文献以外にも、WNCL. 273は『世説新語』など外典の例を引き、また汪維輝「讀《中國中世語法史研究》札記」(『俗語言研究』第四期所収) 111頁には支婁迦讖訳『道行般若経』の例を挙げている。

仏はおっしゃった。

「これら阿闍世王の太子と五百人の長者の息子たちは、菩薩道に身をおいて³³⁾以来無数劫のあいだ、すでに³⁴⁾それぞれ四百億の仏たちを供養し、いま、さらに私を供養しに来た。阿闍世王の太子と長者の息子たち五百人は、みな過去世で、迦葉仏の時代に、私の弟子であったが、いま皆再会した。たがいに³⁵⁾めぐりあったのだ。」

すると比丘たちは仏の話を聞いて、みな飛び上がるほど喜び、だれもが自分のことのように喜んだ³⁶⁾。

仏は阿難におっしゃった。

-
- 33) 住菩薩道 金藏には「作菩薩道」とあり、『平等覺經』にも「作菩薩道」とある。本經の他の箇所では「作菩薩道」は見えるが(300c21.301b28、309c25、311a11.313a23)、「住菩薩道」は出ない。「作」と「住」は書体が似ているので、ここの「住菩薩道」は「作菩薩道」の書き誤りかもしれない。なお、『道行般若經』など他の支婁迦讖訳では「行菩薩道」が一般的。
- 34) 已 句末に「已」をつけて、ある動作が完了し、次の句の別の動作へつなげる用法は漢訳仏典から始まるようだ。多くの場合、梵本の Gerund (絶対分詞) に対応している。Cf. Krsh (1998)、535-536; 辛嶋 1998: 50.
- 35) 共相 漢訳仏典から見える表現。Krsh (1998)、166を参照。
- 36) 代之歡喜 「代歡喜」「代勸助」「代之勸助」「代喜」あるいは「助喜」などと同じく後漢代からの漢訳仏典に出る表現(松尾1998: 41f.を参照)。これらは殆ど、Skt. *anu* □ *mud* (“finds satisfaction in, rejoices; expresses approval, applauds”) に対応している (cf. Krsh [1998].76-77)。この梵語は旧訳では「隨喜」と訳される。「代之歡喜」などの「代」や「助喜」の「助」は、「隨喜」の「隨」と同じく、梵語の *anu* (“along; according to, in conformity with; following after”) を訳したものであろう。
- 37) 凡 数詞の前につけて「全部で、しめて」の意味。「大体、おおよそ」の意味ではない。
- 38) 小劫 仏教梵語の *antarakalpa*、*abhyantarakalpa* の訳語で「中劫」とも訳される (cf. Krsh [1998]、p. 497、s. v. 小劫、p. 596、s. v. 中劫)。劫 (*kalpa*、このときは特に *mahākalpa* [大劫] という場合もある) を八十に分けた一単位を「小劫」という説と(「俱舍論」など)、劫 (*kalpa* = *mahākalpa*) が減して次の劫が始まるまでの過渡期を「小劫」という説がある (cf. BHSD, s. vv. *antarakalpa*, *mahākalpa*)。この場合はもちろん前者の意味。
『平等覺經』には「十八劫」とあるが、これは「十小劫」の誤り。梵本には *daśakalpa* (十劫) とある。
- 39) 須摩題 『平等覺經』には「須摩提」とある。梵本の *Sukhāvati* に対応する古い音写は「須摩題」「須摩提」以外にも「須呵摩提」「須訶摩持」「須阿(呵の誤写であろう)提」などがある(藤田 1970: 432f.を参照)。これらの音写からは **Suhāmatī* あるいは **Suhāmadī* という原語が推定される。*-kh->-h-* は Prakrit で一般的に見られる音変化である(辛嶋 1994: 21-22を参照)。「須呵摩提」「須訶摩持」「須呵提」では *-h-* の音が音写されているが、「須摩題」「須摩提」には *-h-* の音が反映していない。これは原本で *-h-* が脱落していたか (**Suāmātī*)、あるいは訳者が発音しなかった(フランス語やイタリア語のように)からと推定される。この *-h-* の弱化は西北インド方言であったガンダーラ語の特徴に一致する(辛嶋 1994: 29を参照)。さらに、*-vati* / *-matī* の交替は同義の接尾辞の交替とも考えられるが(辛嶋 1994: 67、注68を参照)、*-v->-m-* あるいは *-m->-v-* という Prakrit でひろく見られる変化(辛嶋 1994: 25、26を参照)が生じたとも解釈できる。なお、「題」「提」からは原語が *-tī* とあったか *-dī* と変化していたか分らない。

「阿弥陀仏が仏になられてから全部で³⁷⁾ 十小劫³⁸⁾ になる。おられる国は須摩題³⁹⁾ といい、真西にあり、この閻浮提の地⁴⁰⁾ から千億万の須弥山仏国⁴¹⁾ を越えたところにある。

その国の大地は⁴²⁾、自然の七宝⁴³⁾ —— 第一の宝は白銀⁴⁴⁾、第二の宝は黄金、第三の宝は水晶、第四の宝は琉璃、第五の宝は珊瑚、第六の宝は琥珀、第七の宝は車渠⁴⁵⁾。これらが七宝である —— すべてがそろって⁴⁶⁾ 大地を形成している。ひろびろとして、広く果てしない。(七宝は) みな⁴⁷⁾ 交じりあい、入りくみあい⁴⁸⁾、それぞれが⁴⁹⁾ きらめいて、光を錯綜させ、とてもきれいで⁵⁰⁾、この上なくすばらしい。その七宝の

-
- 40) 閻浮提地界 「閻浮提」は Skt. *Jambudvīpa* (須弥山の南に位置する大陸。私たちの住んでいる世界) の俗語形 *Jambudīva* の不完全な音写。『平等覺經』は「閻浮利」と音写している。これは、*Jambudvīpa* > *Jambudīva* > **Jambuliva* という俗語における音変化を示している (-d->-l-、-p->-v-の変化は辛嶋1994: 19-20を参照)。ちなみに、支婁迦讖訳の『道行般若經』では一貫して「閻浮利」が使われ、その異訳である『大明度經』では一貫して「閻浮提」が使われる。支婁迦讖訳と考えられる本經になぜ「閻浮提」が現れるのであろうか。原本で *Jambudīva* とあったのかもしれないし、あるいは一度「閻浮利」と訳されたが、後に、より一般的な「閻浮提」に書き改めた可能性もある。
- 「地界」は「世界、領域」の意味。「土地の境界」の意味では漢代の外典にも見える (HD. 2. 1025b)。
- 41) 須弥山佛國 308b17、309a5にも同じ表現が出る。梵本や『無量壽經』などで「仏国土」とあるところを本經と『平等覺經』は「須弥山佛國」と極めて特異な表現を使っている。本經 (309b29f.) と『平等覺經』 (291b22f.) には「他方仏国にはみな須弥山がある」という、他の諸本にない (cf. 香川 1984: 202-203) 表現がある。「須弥山佛國」という表現は、「(一つの) 須弥山を有する (一つの) 仏国」すなわち「一仏国」という意味であらうか。
- 42) 其國地皆自然七寶……其實皆比第六天上之七寶也 本經の第三願が成就した様を描いている。この部分は『平等覺經』『無量壽經』にのみ対応がある。また、梵本には「極樂世界にある宝はこの世ではみられない」とのみある (香川 1984: 190-191を参照)。他の漢訳には対応がない。
- 43) 自然七寶 「自然」は訳注 (一) 注(12)を参照。七宝は經典により異同があるが、*Sukhāvatīyūha* などでは、*suvarṇa* (金)、*rūpya* (銀)、*vaiḍūrya* (瑠璃)、*sphaṭika* (玻璃、水晶)、*musāragalva* (磤磤、車渠、サファイア?), *lohitamuktā* (珊瑚)、*aśmagarbha* (瑪瑙) を挙げる。『大阿弥陀經』では梵本と順序が異なっている。
- 44) 白銀 外典では唐代の文献から現れる。Cf. Krsh (1998). 9.
- 45) 車渠 本来は「車輪」や「わだち」の意味 (cf. HD. 9. 1192b)。仏典では *musāragalva* (サファイア? ; cf. BHSD, s. v.) や *karkṣṭana*, *karkṣṭana* (猫目石) の訳に使う例が多い。「車渠」「磤磤」とも書かれる。要検討。
- 46) 自共 「ともに」「みんなで」の意味。本經では、あとに「阿彌陀佛所可教授、講堂精舍、皆復自然七寶、……自共相成」(303c25f.) という表現が出る。また、支婁迦讖訳『道行般若經』にも「四天王白佛言：『我輩自共護是善男子、善女人學般若波羅蜜者、持者、誦者。』」(T8. 431a25 f.) という例がある。Zhu 26にも幾つかの例を挙げている。なお、『無量壽經』のこの箇所は「自然七寶……合成爲地」(270a8) とある。
- 47) 皆自 「自」は二音節にするために加えられた接尾辞でそれ自体は意味がない。訳注 (一) 注(13)を参照。
- 48) 轉相 Krsh (1998). 608を参照。
- 49) 皆自 すでに『史記』などから見える表現。仏典での用例は Krsh (1998). 160を参照。
- 50) 極自軟好 訳注 (一) 注(13)を参照。

大地は、八方上下（の世界）の宝の中の最高のものがみな自然に集まってあらわれたものだ⁵¹⁾。これら宝玉はみな第六天（他化自在天）⁵²⁾の七宝にも似ている。

その国には須弥山がなく⁵³⁾、太陽・月・星々・（欲界の下から）第一天の四天王と第二天の忉利天はみな虚空の中に浮いている。その国土には大海がなく、小さな海もない。大きな川もガンジス河もない。山、林、溪谷もなく、(303c) 暗いところもない。(このように) この国の七宝でできた国土は平らである。

地獄⁵⁴⁾・鳥獸・餓鬼や飛ぶ虫・這う虫などはいない。阿修羅⁵⁵⁾や竜たち、鬼神は

雨期はなく⁵⁶⁾、春夏秋冬もなく、厳しい寒さ、厳しい暑さもない。つねに温和でほどよく⁵⁷⁾、たとえようのないほど心地よい⁵⁸⁾。

自在に⁵⁹⁾ 生じるあらゆる種類のものや様々な味の食べ物がみなあり、何か欲しい

51) 衆寶中精都自然合會，共化生耳 本經には「衆寶中精味自然合會。其化生耳」とあるが分かりにくい。今は『平等覺經』の読みに従い改めるが、検討を要する。本經の別の個所にも類句がある。すなわち「此華香都八方上下衆華香中精也。自然化生耳」(304b12-13)；「其亂風者，……都八方上下衆風中精自然合會，化生耳」(305c5-7)；「此百味飲食，八方上下衆自然飲食中精味，甚香美，無比，自然化生耳」(307a7-9)。最後の例に出る「精味」のせいで、この個所にも「精味」と書き誤られたのであろうか。

52) 第六天 訳注（一）注(49)を参照。

53) 其國中無有須彌山 仏教の世界観では、世界の中心に須弥山が高くそびえ、その中腹に四天王天があり、頂きには帝釈を主とする三十三天があつて、山の周りを太陽・月・星が巡っていると考えられていた。この世界観は初期仏教の文献から見られる。大乘仏教になって他方仏国の概念が成立すると、他方仏国も同じ構造になっていると考えられたらしく、本經と『平等覺經』には「他方仏国にはみな須弥山がある」という表現がある（注〔41〕を参照）。阿弥陀仏国は、他の仏国とは異なり、凸凹がない世界で須弥山もないというのである。この説明を受けて、後に阿難は「阿弥陀の仏国では、四天王天と三十三天は何に支えられて存在するのか」と釈尊に疑問を投げ掛けている（309c1；香川 1984：202-203）。

54) 無有泥犁……諸龍鬼神 本經の第一願が成就した様を描いている。諸本にも対応がある（香川 1984：190-191）。

55) 阿須倫 MC. ?ā sju ljwen. Skt. *asura* に対応する音写。なぜ「羅」(la)ではなく「倫」(ljwen)という音写を使ったかは問題。複数・対格形 *asurān* を音写した可能性も否定できない。この音写は支婁迦讖訳からみえる（例えば、『道行般若經』T8, 433b16, 434c28など）。竺法護訳の『正法華經』の例は、Krsh (1998).1 を参照。羅什前後から「阿修羅」の音写が使われるようになる。

56) 終無天雨時……甚快善無比 『平等覺經』と『無量壽經』以外の諸本には対応する文がない（香川 1984：200-201参照）。

57) 和調中適 「和調」は先秦代の文献から見える表現（Cf. HD. 3. 276b）。「中適」は前漢代の文献から見える（Cf. HD. 1. 615a）。

58) 快善 訳注（一）注(18)を参照。

59) 皆有自然……即皆隨意 このこと307a4～20とは本經の第十四願が成就した様を描いている。諸本との対照は、香川 1984：216-217を参照。

と思えば、ずっと目の前にあらわれ、用がなくなれば、ずっときえる。第六天（他化自在天）ではものが自在に生じるように⁶⁰⁾、（その国でも）すべてが自由自在⁶¹⁾、意のままになる。

その国⁶²⁾では菩薩と阿羅漢だけがいて、女性はいない。寿命は無数劫である。女性がそこに生まれるとすぐに男性に変わる。

無数⁶³⁾の菩薩と阿羅漢だけがいて、みな⁶⁴⁾（一切を）見通し、（あらゆる音を）はっきり聞き分け⁶⁵⁾、みな互いに遠くから見、互いに遠くからじっと見つめ、互いに遠くから語り声を聞く。

みな道⁶⁶⁾を求める善人で、みな一様で、異なった人はいない。その⁶⁷⁾菩薩と阿羅漢たちは容姿がみな端正で、清らかで、とても美しく、みな同じ（肌の）色で、歪んでいたり醜い⁶⁸⁾ものはいない。

菩薩と阿羅漢たちはみな才能と勇気があって、とても賢い⁶⁹⁾。みな自然に生じた衣を着ている。心の中で念じていることは道の本質⁷⁰⁾である。何かを⁷¹⁾言おうとすると、お互いあらかじめ言おうとしていることがみな分かる。常に正しい事柄を話し、話す内容はいつでも（仏の）教え⁷²⁾で、それから外れた悪いこと⁷³⁾は話さない。彼らの語る声は三百の鐘の音のようである⁷⁴⁾。

60) 比如第六天上自然之物 本經の他の個所にも類似した表現がでる。すなわち「其人於城中亦快樂。其城中比如第二^{切利}天上自然之物」(310b15-16), 「比如第二^{切利}天上自然之物」(310c28)。

61) 恣若自然 「恣若」は辞書類にとられていない。本經では305c3, 313b19にも出る。

62) 其國中悉諸菩薩……即化作男子 本經の第二願が成就した様を描いている。『平等覺經』以外の諸本には対応する文がない（香川 1984：225参照）。

63) 但有諸菩薩……現在却知無極 阿弥陀仏国の菩薩・阿羅漢について説明するこの部分（303c9-25）は『平等覺經』以外の諸本には対応する文がない（香川 1984：225参照）。

64) 悉皆 仏典から見える表現。Krsh (1998). 482参照。本經にも多く出る。

65) 洞視徹聽 訳注（一）注(87)を参照。

66) 道 訳注（一）注(23)を参照。ここでも「さとりの」の意味。

67) 其諸菩薩……無有偏醜惡者也 本經の第九願が成就した様を描いている。

68) 偏醜惡 あるいは「とても醜い」の意味か。

69) 才猛黠慧 「才猛」は辞書にない表現。HD. 1. 302a. 「才勇」を参照。「黠慧」はKrsh (1998). 484-485を参照。

70) 道德 ここでは「さとりの本質」「さとりのものの」の意味。「道德」がSkt. bodhiに対応する例が『正法華經』に見える（Krsh [1998]. 87-88）。

71) 其欲語言，皆豫相知意所念言 本經の第十願が成就した様。

72) 經道 訳注（一）注(4)を参照。

73) 他餘之惡 あるいは「ほかの人の悪いこと」の意味か。「他餘」は同義字を重ねた語。辞書に採られていない。『道行般若經』には「餘他」(T8. 436a6) という類似の表現が見える。

74) 其語言音響如三百鐘聲 本經の第十六願が成就した様。「如三百鐘聲」は訳注（一）注(84)を参照。

みな⁷⁵⁾敬愛しあい、決して憎しみあわない。みな⁷⁶⁾長幼、上下、(往生の)先後を考慮して話し、正しい軌範と礼法にかなっている。互いに兄弟のように敬いさえ、思いやりと正しい行いを実践している。でたらめに行動せず、言葉は戒律に従う⁷⁷⁾。互いに教えあい、互いに反発せずに、相手の意見を受け入れる。

みな⁷⁸⁾心がきよらかで、欲望がなく、怒り、淫らな心、愚かな姿態はまったくない。邪な気持ちで女性に思いをかけることがない。

みな^{79),80)}智慧あり、勇敢で、和やかな心をもって楽しみ、(仏の)教え⁸¹⁾を好む。生存をくり返してきた億万劫の過去世以来の過去の生存において(なしてきた)善悪と生死を自分で知っており、現在と将来のことも⁸²⁾果てしなく知っている。」

注

注で使用した略号は次の通り：

BHSD=Edgerton, F., *Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary*, New Haven, 1953 (repr. Delhi, 1970, 1972)

Coblin=W. South Coblin, *A Handbook of Eastern Han Sound Glosses*, Hong Kong 1983 (The Chinese University Press)

GY=楊伯峻、何樂士『古漢語語法及其發展』北京 1992 (語文出版社)。

HD=漢語大詞典、全13冊、上海、1986～1994。(漢語大詞典出版社)。

Krsh (1998)=*A Glossary of Dharmarakṣa's Translation of the Lotus Sutra* 正法華經詞典, Seishi Karashima, Tokyo 1998, The International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University (Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica I).

75) 皆相敬愛………以仁履義 本經の第十二願が成就した様を描いている。

76) 皆以長幼、上下、先後言之、以義如禮。轉相敬事、如兄如弟、以仁履義 儒教的な表現である。なお、本經で「以義如禮」とあるところ、『平等覺經』には「都共往會以義而禮」とある。「如」と「而」はしばしば交替する(訳注(一)注(24)を参照)。「轉相」はKrsh(1998), 608を参照。

77) 言語如誠 本經の高麗藏本と房山石經以外は金藏も含めて「言語如誠」とする。『平等覺經』も「言語如誠」。

78) 皆心淨潔………無有邪心念婦女意 本經の第十一願が成就した様。

79) 悉皆 注(64)参照。

80) 悉皆智慧勇猛………現在却知無極 本經の第二十二願が成就した様。

81) 經道 訳注(一)注(4)を参照。

82) 却 訳注(一)注(97)を参照。

MC=Middle Chinese (表記方法は Coblin 1983: 41に準拠する)

WNCL=蔡鏡浩『魏晉南北朝詞語例釋』, 南京 1990 (江蘇古籍出版社).

Zhu=朱慶之『佛典與中古漢語詞彙研究』, 台北 1992 (文津出版社).

ZXYL=董志翹・蔡鏡浩『中古虛詞語法例釋』, 長春 1994 (吉林教育出版社).

香川 1984=香川孝雄『無量壽經の諸本對照研究』京都 1984 (永田文昌堂)

辛嶋 1994=『「長阿含經」の原語の研究——音写語分析を中心として——』, 東京 1994 (平河出版社).

辛嶋 1998=「漢譯佛典的語言研究(二)」『俗語言研究』第五期, pp. 47-57 (禪文化研究所発行)

藤田 1970=藤田宏達『原始淨土思想の研究』, 東京 1970 (岩波書店).

松尾 1988=松尾良樹「漢代訳經と口語——訳經による口語史・初探——」『禪文化研究所紀要』第15号, pp. 25-57.

訳注(一)=辛嶋静志「『大阿彌陀經』訳注(一)」『佛教大学総合研究所紀要』第6号 (1999), pp. 135-150.